

センサー

株東レ経営研究所
産業経済調査部
シニアエコノミスト

福田 佳之

149

何を申そう、私は子どもの頃から湖で泳いできた人間である。といっても湖の端から端まで何度も往復するような河童みたいな泳力を持っているわけではな

た砂浜があつて泳げる範囲を示すブイがあつて飲み食いできる出店がある。琵琶湖ぐらゐ大きいと対岸は見えないため、非常に開放された感覚を持てる。湖の水も透明度が高く、浅いところだと湖底が見える。湖面からおいがすることもな

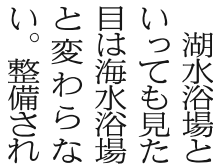
琵琶湖で泳ぐということ

驚く。「琵琶湖って泳げるんですか？」海水浴場ならぬ湖水浴場(水泳場とも言う)は昔は霞ヶ浦など関東地方にもいくつかあつたらしい。経済成長に伴つて湖の水質が悪化したことなどで湖水浴場が閉鎖されていき、現在では田沢湖(秋田県)や猪苗代湖(福島県)、そして琵琶湖(滋賀県)など国内のいくつかの湖

い。夕方になるとさほど大きくはないものの湖岸に波が打ち寄せてくる。一言でいうと海のような環境である。湖水浴のメリットは、海水ではないのでべたべたせず、後始末が簡単である。さつと体を拭いてそのまま帰つても支障がない。次にクラゲが出てこない。海水浴だとお盆の頃を過ぎるとクラゲが出てくるので泳げないとの話があるが、そんなこととは無縁である。暑ければ九月ぐらゐまで余裕で泳げる。さらに海と違つ

て混んでいないのも助かる(人気がないから当たり前)。海のようにでて海とは違つて閑静で落ち着いた雰囲気があり、のんびりと過ごして疲れを癒すにはもつてこいである。もしチャンスがあれば湖水浴をお試しあれと思う。

減少傾向を示している。植物プランクトンの養分となる窒素やリンの流入が減っていることが大きい。琵琶湖の水質が改善した背景には、政策的な動きがある。一九七七年に琵琶湖で赤潮が発生して大問題となった。草の根レベルで粉石けんを使用する県民運動が盛んとなり、一九七九年にはリンを含む合成洗剤の使用・販売を禁じるなどの「滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」が可決された。一九八〇年代に入ると、下水道の普及が進展し、一九八〇年時点で5%前後の普及率に過ぎなかつた下水道は、二〇一七年三月末時点で九割近くに達している。下水処理場では窒素やリンを除去する高度処理が行われており、琵琶湖に流れ込む窒素やリンが減っている。



湖。実際、琵琶湖の定期水質調査結果を見ると、琵琶湖の水質が長期にわたつて改善していることが分かる。一九九〇年代中ごろから透明度の上昇と懸濁物質の低下が顕著となっている。植物プランクトンの現存量も湖の南部を中心に長期的に見ながら思った今夏である。

え、都市化が進行してきたにもかかわらず、今の琵琶湖の水の方が透明な気がする。また湖底を足でさうとうとしじみなどの貝にぶつかると、もちろん生きている貝だ。なんだか気持ちがいい。

昨今、地球温暖化防止など環境保護の動きが国や企業レベルで活発である。国民の意識も高い。しかし、環境保護に成功しているとの実感を持てずエコ生活に食傷気味の人々も少なからずいるのではないか。生活者レベルで地球環境がよくなっていると身近に実感できる機会も必要なのでは、ときれいになった琵琶湖を見ながら思った今夏である。